

岩田遵子著

『現代社会における「子ども文化」成立の可能性——ノリを媒介とするコミュニケーションを通して——』

(風間書房 2007年2月)

川勝泰介 (京都女子大学)

本書は、著者が日本女子大学大学院に提出された博士論文がもとになっており、平成18年度の科学研究費補助金(研究成果公開促進費・学術図書)の助成を受けたものである。

著者である岩田遵子氏は、もともと音楽教育専攻であり、本書においても児童文化財としての子守唄や童謡に言及されているのだが、そればかりではなく、絵本や読み聞かせなどの分析においても、リズム(本書では、いわゆるリズム概念と区別して、これを「ノリ」と呼ぶ)という著者本来の音楽的素養を十分に発揮した独自のアプローチが試みられている点が、本書の大きな特徴であると言えよう。

本書に序文を寄せた小川博久氏は、「本書は、従来の「子ども文化(児童文化)」に一石を投じ、今後の「子ども文化」研究のターニングポイントになる研究であると共に、学校教育における教授活動のあり方に反省を迫る力作であると確信する。(中略)「子ども文化」というジャンルは学校教育の中では成立し得ず、学校外の状況の中でのみ可能であるという前提が立てられてきたと言える。この流れは、戦後において「児童文化」から「子ども文化」へと研究の名称が変更されると共に、「子ども文化」の主体は子どもの創造する文化であり、その中核は「子どもの遊び」であると主張される時代においてさえも、継承されたのである」として、本書が「この系譜を根底から問い直そうという試みである」とも述べている。

さて、本書は大きく分けて第一部と第二部からなっているが、第一部に入る前に序章が、さらに第一部は2章、第二部は3章に分かれ、最後に終章という構成になっている。

まず、序章では「なぜ「子ども文化」を問うか」と題し、わずか4ページほどではあるが、本書においてテーマとする「子ども文化」へのアプローチの基本姿勢について述べている。すなわち、日本の近代社会の成立と共に成立した近代学校が、前近代性を潜在させるがゆえに、大正デモクラシーに近代的な「子ども」の誕生が求められてきたのだと述べ、大正期に展開された童話・童謡運動に託された西欧的な自律的人格形成の夢は、学校外の「子ども文化」こそが可能にするという考えが支配的になったというのである。しかし、現代の高度消費社会では、子どもは遊びの消費者となり、子どもたちが自ら何かを作り出すといった遊びの姿、「子ども文化」創成の夢は消失したかに見える」と著者は述べる。

先に述べたように、大正期以後、子どもの主体的人格形成は、〔学校内〕対〔学校外〕という対立軸でとらえられてきたが、学校外にこそ主体性の形成可能性があるという「神話的構造」をあらためて問い直すことなしには、子どもの主体性の問題を論じることはできないと考えるというのが、本書において著者が「子ども文化」を問う理由である。

そこで、第一部においては、子守唄や童話の構造分析を通して、主体性形成の場と考えられてきた大正期の「子ども文化」が前近代性を潜在させていることを明らかにする。すなわ

ち、近代学校は子どもの主体性を抑圧しており、学校外にこそ子どもの主体性を形成する「子ども文化」の成立可能性がある」と論じてきた児童文化論者の考えを批判的に検討し、子どもの主体性形成の場としての「子ども文化」の成立可能性を、学校外よりもむしろ学校内に求めることが必要であることを論じようとするのであり、しかもその可能性を教師と子どもの身体的な「ノリの共有（身体的同調）」に求めるのである。

また第二部においては、こうした第一部の考え方に立ち、学校教育における「子ども文化」生成の実際を幼稚園における実践事例をもとに、エスノグラフィックな研究方法によって論証しようとしているのだが、ここにこそ著者の音楽的素養が十分に生かされた固有の論の展開を見ることができると言えよう。なお、この第二部では、小川博久の保育を考える際に「人間文化」「保育文化」「子ども文化」の3つのカテゴリーに分けて考えることが必要であるという論を敷衍して、「保育文化」における「子ども文化」の生成と、その生成において媒介となる教師の役割を絵本の読み聞かせ、素話、歌遊びなどの保育実践の詳細な事例を通して論証している。

ところで、日本子ども社会学会設立のきっかけを作った藤本浩之輔は、1960年代のテレビや子ども向け週刊誌の創刊を中心とするマスコミ等による子どもをとりまく環境や生活の変化と子どもの遊びの衰退に危機感を抱き、従来のおとなを中心とした「児童文化」に対して子どもが主体的に創造し伝達する行動様式を「子ども文化」と称することを提唱した。この「子ども文化」の考え方は、子どもの世界における伝承性の崩壊や子どもの生活の危機が叫ばれる1980年代になってにわかに注目されるようになり、これ以後、社会科学の分野を中心に広く使われるようになったのであり、日本子ども社会学会においても、研究分野の筆頭に「子ども文化」(ホームページ上では「こども自身の文化」)が掲げられているのは周知のことである。しかしその一方で、これまでの「児童文化」を「子ども文化」に置き換えて使う傾向も見られ、こうした用語上の混乱が研究上の大きな障害にもなってきたため、これまでも本学会編の『いま、子ども社会に何がおこっているか』(北大路書房、1999年6月)や研究大会におけるテーマセッションなどでしばしば指摘し、話題にしてきた。

一般に、児童文化財を中心にしてとらえられている「児童文化」の領域は、文学から絵画そして音楽から演劇に至るまできわめて広範な内容を含む。そのため、そのすべてに精通した研究者の存在は皆無に等しく、その意味でさまざまな領域を専門とする研究者によって学際的なアプローチが求められる。しかし、そのためには各研究者の使用する用語に統一性がなければ、ただ混乱を招くだけにすぎない。

本書における通説を根底から問い直そうとする大胆な試みは評価しつつも(ただし、童話・童謡だけで児童文化全体を論じたり、巖谷小波の「こがね丸」と佐藤紅緑の少年小説をとりあげて論じることで児童文学史の通説を問い直すことができるのかに関しては、はなはだ疑問ではあるが)、まず本書における「子ども文化」や「児童文化」の用語の使われ方、また最近の児童文化および児童文学の研究成果をまったく反映していない点に関して、大いに不満をもつ結果となったのが正直な感想である。